オテロ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オテロ

【Nコード】

N1216I

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

奴隷からヴェネツィアの將軍にまでなったムーア人オテロ。彼には美しい妻デズデモナがいた。しかし嫉妬と憎悪に燃える騎手イヤーゴの姦計により彼は貞節な妻を疑い破滅へと落ちていく。シェークスピア原作、ヴェルディ作曲の不滅の名作を小説にしました。あらすじ等はヴェルディのオペラ版にそっています。あちらにも掲載してもらっています。

<http://www.painwest.net/>

第一幕その一

オテロ

第一幕 キプロスの港

キプロスの城外に港がある。海は荒れ狂い夜空は嵐に支配されていた。

雨と雷鳴が嵐の友人となり共に荒れ狂っている。その中で人々は船を待っていた。

「帆だ！帆が見えるぞ！」

彼等の中の一人が叫ぶ。

「旗印も見える。闇の中に」

「何の旗印だ？」

「見えたぞ」

その中で一際立派な服を着た堂々たる体躯の男が告げた。キプロスの前の総督であるモンターノだ。彼もまた見に来たのである。今の総督であるオテロの帰還を待つて。

「翼を持った獅子の旗が」

「私にも見えた」

華麗な軍服と鎧を着た若い男も言う。彫の深い整った顔に黒い髪と瞳をしている。彼は今の総督であるオテロの副官である。名をカッシオという。

「稲妻の中に翼を持った獅子の旗を」

「オテロの旗か」

「そうだ」

カッシオは人々に答えた。

「見えた。あの旗が」

「ラツパの音だ！」

人々は今度は雷鳴ではなくラツパの高らかな音を聞いて。

「聞こえる！ヴェネツィアのラツパの音だ！」

「それだけではないぞ！」

彼等の耳に雷鳴が響き渡る。しかし聞こえてきたのはそれだけではなかった。

「聞こえるか！」

「ああ！」

口々に叫ぶ。

「大砲の音だ！」

「戦いが行われている！」

それを察してまた声をあげる。

「船が一隻沈んだ」

「オテロの船ですか！？」

「いや、違う」

モニターノはそれは否定した。

「彼の船ではない。だが一隻の船が波間に沈みもう一隻の船が天まで持ち上げられた」

「恐ろしい状況だ」

「稲妻の中にまた見えたぞ！」

また一人叫んだ。

「船首が波間から現われた！」

「トルコの船だ！」

また稲妻が映し出した。

「稲妻だ！雷鳴だ！」

「旋風だ！暴風だ！」

それ等が支配していた。海を。

「波は立ち騒ぎ風は荒れ狂い」

「海も揺れ山も動く！恐ろしい戦場だ！」

「ああ！」

女達が大砲の音を聞いて悲鳴をあげた。

「無事なのかしら、私達の戦士は」

「煙が見える。炎も」

「今度見えたのはそれだった。」

「恐ろしい暗黒が炎となりそして一層気味悪く消えていく。」

「宇宙は苦悶し幻の北風が飛ぶように走り巨人の凄まじいラッパが響き渡る。」

「嵐の凄まじい音が！」

「聞こえてきたのだった。」

「ヴェネツィアの運命があの中にある。暗黒の海の中に！」

「神よ護り給え！」

「キリストに対して祈った。」

「彼等の運命と星を！」

「ヴェネツィアの地と天を！」

「穏やかな海の底深く忠実な錨を置かせ給え！」

「見ろ！」

嵐の中でも後ろに整えた黒髪と鎌を思わせる黒い髭を生やした男が叫んだ。黄色い服を着て靴が先に尖っている。黒いズボンは身体にぴったりと合っている。白いカラーが目立つ。

彼の名をイヤーゴという。オテロの旗手を務めている。歴戦の男であり根っからの武人として評価が高い。そういうことになっている。

「主帆が裂けたぞ！」

「おお！」

彼等はイヤーゴの言葉を聞いて驚きの声をあげた。

「船首が岩礁にぶつかった！」

「オテロの船だ！」

また稲妻の中にそれを見たのだった。

「神よ、助け給え！」

「いや」

イヤーゴだけがその中で呟く。

「この海の中があいつの墓場になれば」

「見ろ！」

人々がまた叫んだ。

第一幕その二

「助かったぞ！」

「沈んでいない！」

こう叫ぶのだった。

「助かった！トルコ人は逃げていく！」

「ヴェネツィアが勝ったんだ！」

それが見えた。人々の間で歓声が起こる。

「船が来たぞ」

「ああ」

勝利を収めたヴェネツィアの艦隊が港に戻って来た。多くの船が傷を受けているがそれでも港に戻って来たのだった。

「網に掴まれ！ロープを投げろ！」

船乗り達が船の中から叫ぶ。

「ここで力を込めろ！」

「もう少しだ！」

港に向かってロープが放たれる。港の者達がそれを受け取って繋ぎ止める。

「戻って来たぞ！」

「オテロが！兵士達が！」

「英雄が！」

そして一人の軍人が彼等の前に姿を現わした。見事な黒と金の上着に黒いズボンを穿き白いマントを羽織っている。漆黒の肌を引き締まった顔。短い縮れた髪を持っている。逞しい身体をしている。その彼が今ヴェネツィアの者達に対して姿を現わしたのだった。

「喜べ！」

彼は剣を思わせる張りのあり引き締まった声で彼等に告げた。

「高慢な回教徒達は海に沈んだ。栄光は我等の上にある。彼等は海の底に沈んだ！」

「勝利だ！」

「勝ったんだ！」

それを嘔み締めまた叫ぶ人々だった。

「奴等はいなくなつた！」

「レクイエムとして怒涛の激しい攻撃と暴風の輪舞を受けて海の底の恐ろしさを味わうのだ」

「そして我等は勝利を！」

「オテロ万歳！ヴェネツィアの獅子万歳！」

「ヴェネツィアに栄光を！オテロに栄光を！」

皆オテロとヴェネツィアを祝う。しかしその中で一人金色の髪に青い目を持つ気品のある男が海に身を投げようとした。それをイヤーゴが止めた。

「ロデリーゴ殿、お止めを」

「しかし」

イヤーゴに顔を向けて言う。思い詰めた顔で。

「私はもう」

「女との恋で身投げしても何にもなりません」

「しかしだ」

彼はそれでも言う。周りでは兵士達が船の荷を下ろし武器が戻されていく。嵐は何時の間にか収まり兵士達が松明を持って照らし人々は薪に火を点けて暖を取る。やがて底に酒が運ばれ居酒屋も騒ぎだしたのだった。イヤーゴはその中にロデリーゴを誘いながら親身な顔をして彼に囁くのだった。

「デズデモーナですな」

「そうです」

ロデリーゴはその名に頷く。

「彼女はもう」

「あの黒い肌の男の妻」

オテロのことである、

「美しいあの人の唇はあの男の厚い唇と重なる」

「何ということだ」

ロデリーゴはそれを聞いて身震いする。

「恐ろしい。悪夢だ」

「私は貴方の友人です」

親しげにまた囁く。

「ですから申し上げます。あの方は貴方のものになります」

「まさか」

「本当です」

にこりと笑った仮面を被っていた。

「私は嘘は申しません」

「しかし」

「私もまたあのムーア人が嫌いです」

目だけが本当のことを語っていた。口は笑っているがその目はにこりともしていない。闇の中でランランと光っていた。

「それにあの男も」

酒盛りの中に入っているカッシオを指差し憎々しげに語る。

「憎んでいます。本来私が副官になる筈だったのにオテロが勝手に決めてしまい」

「旗手に」

「私こそ副官の地位に相応しい。あの様な書記官あがり」

昔から戦場を巡ってきた男としてそれが許せなかったのだ。彼はずっと軍人として生きてきているのだ。そのことに誇りも持っていたのだ。

「だからです。私は」

「はい」

ロデリーゴに話し続ける。だが二人は街の片隅に入った。そこで誰にも気付かれずに話をするのだった。悪魔が囁く様に。

その間も街の人々は騒ぐ。最早乱痴気騒ぎに近い。

「さあ祝おう！」

「さあ歌おう！」

皆杯を手に歌い合う。

「この素晴らしい日を」

「勝利の日を」

「さあロデリーゴ」

彼等の中の中に話し終えたイヤーゴが親しげにロデリーゴをその中に導き入れた。

第一幕その三

「飲みましょう」

「酒をですか」

「そう。貴方も」

ロデリーゴに話したことを隠して丁度そこにいたカッシオにも声をかける。もう彼は顔を真っ赤にさせている。ほぼ完全に酔い潰れていた。

「私はもう」

「まあそう言わずに」

断る彼に赤いワインを入れた杯を差し出す。彼自ら入れたものだ。

「是非。飲んで下さい」

「だからもう」

「今日は勝利の日ですぞ」

それをあえて語るのだった。

「ですから」

「しかし本当にもう」

「これは義務です」

「義務!？」

「そう、義務なのです」

今度言うのはそれだった。

「総督とデズデモーナ様の婚礼を祝う」

「そうだな」

二人の名、特にデズデモーナのそれを聞くとカッシオは顔を上げた。イヤーゴはそれを見て口元を僅かに歪めさせた。

(よし)

そのうえで心の中だけで呟いたが。これは彼以外の誰にもわからなかった。

「あの人はまさに花だ」

「花ですか」

「天使だ」

「御聞きですね」

「イヤーゴは今度はそつとロデリーゴに囁く。

「今の言葉を」

「あの輝くばかりの美しさは歌人達を惹き付ける」

「しかも非常に慎ましやかだ」

「ロデリーゴはイヤーゴの言葉のままカツシオを見ながら彼も呟く。

「イヤーゴ」

「何でしょか」

「カツシオにもにこやかに言葉を返す。

「君もあの方を讃えて歌わないのかい？」

「ほら」

「カツシオには答えずにロデリーゴに囁くのであった。またしても。

「御聞きなさい。よくね」

「ああ」

「私は遠慮させて頂きます」

「またカツシオに顔を戻して述べる。

「私はただの批評家ですので」

「そうか。ならいい」

「申し訳ありませんが」

「それならそれでいいよ。ただ」

「ここでまた彼は言うのだった。酒に誘われて。

「あの人は本当にどんなに褒めても褒め過ぎるといふことはない」

「また言っていますね」

「そうだな。しかし」

「ここでイヤーゴの作った顔を見るのだった。しかし彼が顔を作っ

ているのは気付かない。

「何かを恐れているな」

「喋り過ぎです」

カッシオを指差して囁く。

「溢れんばかりの若さと酒がそうさせています」

「若さと酒がか」

「そうです。貴方の恋路を邪魔するあいつは女たらし」

「私の恋路を」

「そうです。悪知恵の回る女たらしです」

言葉を付け加えるタイミングも狙ったものだった。

「御気をつけを」

「それでどうするのだ？」

「彼奴は酔うと訳がわからなくなります」

カッシオの酒癖が悪いことももう承知しているのだった。

「ですからどんどん」

「わかった。では」

「おおい、坊主」

店の坊主には愛想がいい。

「酒を持って来てくれ。赤ワインをな」

「はい、只今」

すぐにワインが来た。それは三つあった。ついでに酒瓶も置かれた。

第一幕その四

「さあ、どうぞ」

「有り難う」

まずはロデリーゴに一杯にこやかに勧める。それと共に自分も持っている。それだけではなくカッシオのところにも杯を置いてそつと勧めるのだった。

「貴方も」

「あつ、有り難う」

「さあ、喉を潤して一気にあおって飲み干して」
飲むように煽る。

「美酒は楽しむもの」

「それじゃあ。この葡萄酒の賜物を」

結局カッシオもそれに乗った。やはり酒には勝てなかった。
「美しい霧に心は曇る」

「バツカスの誘惑にかかった者は図々しくなり狂気じみる」

またイヤーゴを煽るようにしてきた。今度は歌だった。

「私と一緒に飲みましょう。いざ」

「誘惑にかかった者は共に飲もう」

「そして楽しもう」

「だからこそ」

客も乗ってきた。ここでイヤーゴはさらに煽る。

「皆で飲もう。君と一緒に」

「君と一緒に」

「よしっ」

カッシオはそれに応えて一杯飲んだ。あつという間に酒を飲み干す。それを見届けてからイヤーゴはまたしてもロデリーゴの耳元に囁くのだった。

「あともう一口です」

「もう一口か」

「そうです。さて」

また煽りに入るのだった。歌を再開する。

「私が酔った時には世界が鼓動を打つ。皮肉な神と共に進むのだ」

「おっ、面白い歌だな」

「そうだな」

彼等はそれを聞いてイヤーゴに注目した。

「皮肉な神か」

「バツカスは確かに」

だがそれをバツカスと思うだけだった。その間にまたカツシオの杯にワインが入れられ彼はそれに口をつける。それからまた述べるのだった。

「美しいリユートの調べの様に心が揺らめき喜びが行く手に躍る」

「さあさあ、だからまた一杯」

「また一杯」

止めの様にまた一杯勧めるのだった。

「どうぞ」

「済まないな」

こうして遂に出来上がった。イヤーゴは彼の顔を見てそれを確認してからまた述べたのだった。

「これでよし」

「いいんだな」

「あとは喧嘩をさせるだけです」

カツシオを喧嘩させるといつのだ。

「そうすれば後はこちらのもの」

「たかだか喧嘩でか」

「何ごともまずは些細なことからはじまるのですぞ」

いぶかしむロデリーゴに対しての言葉だった。

「ですから何の問題もないのです」

「そうか」

「ああ、目が回る」

カッシオは酔い潰れる寸前の顔で呻いていた。

「周りが赤いな。火事でもないのに」

「飲め飲め」

周りが嘔し立てる。イヤーゴに乗せられたままで。

「どんどん飲んで」

「おい、カッシオ君」

「はい」

「むっ、いいタイミングだ」

イヤーゴはモニターノの声を聞いて満足そうに笑った。

「これは尚よしだな」

「衛兵が君を待っているんだが」

「わかりました」

それに応えて立ち上がる。しかしその足はもう完全に千鳥足だった。

「おっとと……」

「むっ、これは」

モニターノがやって来た。それで丁度千鳥足のカッシオを見たのであった。

「酔っているのか」

「実はですね」

イヤーゴは彼の前に進み出た。今度は片膝を垂れて恭しく述べる。

第一幕その五

「彼は毎晩この有様なのです」

「何っ、毎日だと」

「そうなのです」

申し訳なさそうに述べる。

「これがまた。言いにくいのですが」

「総督はそれを御存知なのだろうか」

実はモニターノはオテロの部下だったことがある。互いに知った仲なのだ。

「では巡回に」

「これはいい」

千鳥足のカツシオを見てロデリーゴが笑っている。

「面白いことだ」

「？今笑ったのは誰だ」

カツシオはロデリーゴの笑みに気付いて彼に顔を向けて問うた。

「決まっている。私だ」

「どういつつもりだ」

「どういつつもりもこういつつもりもあるか」

あえてカツシオを挑発するように言ってみせた。

「酔っ払いを笑っている。それだけだ」

「何っ、貴様」

酒癖の悪さが出た。かっとなって彼に挑みかかる。

「やるつもりか」

「何っ、この酔っ払い」

ロデリーゴもそれに乗ろうとする。だがその二人の間にモニターノが入って止めるのだった。

「馬鹿なことは止める。特にカツシオ」

カツシオに顔を向けて言う。

「頭を冷やせ。いいな」

「頭を冷やせだと？」

だがその言葉は逆効果だった。かえってカツシオを怒らせてしまった。彼は今度は止めに入ったモニターノに対してつつかかるのだった。

「邪魔立てするのか！？それなら」

「酔いどれの言い草だ」

モニターノはそれを冷静に述べただけだった。

「とにかく水でも飲んでだ」

「誰が酔いどれだ！」

今度は剣を抜いてきた。

「これ以上言えば貴様も」

「何処まで馬鹿なんだ」

モニターノは剣を抜いたカツシオに呆れながらも止むを得なく対する。彼もまた剣を抜いたのだ。そしてカツシオの剣を受けはじめた。

「おい、大変だ！」

「刃傷沙汰だぞ！」

「さて、これでまた次の段階になりました」

イヤーゴは騒動が本格化したのを見届けてからまたロデリーゴに顔を向けた。

「港に行かれて暴動だ、と繰り返し叫ばれるといいでしょう」

「それだけでいいのか」

「そう、それだけです」

それだけだと告げる。

「それで充分なのですよ」

「うつむ。それだけでか」

「混乱と恐怖がこれで起こります」

イヤーゴの弁ではこうであった。

「そういうことです」

「わかった。それでは」

ロデリーゴは彼の言葉に頷いてこの場を後にする。イヤーゴはまた顔を変えて喧嘩を止めに入った。

「御二人共、もうその位にして」

「何て騒ぎ！」

「剣よ！」

女達も騒ぎだした。

「逃げましょう！」

「巻き込まれたら大変よ！」

「おい、血が！」

「前の総督が！」

モンターノは腕に怪我をした。それを見て男達も血相を変える。

「御二人共止めて下さい！」

「落ち着かれて下さい」

イヤーゴもその中で演技を続ける。

「これ以上の騒ぎは」

「警鐘が鳴ったぞ！」

「衛兵達が来ている！」

「よし」

イヤーゴは警鐘が鳴った方に顔を向けて呟いた。

「これでまた話が動くぞ」

衛兵達がドヤドヤとやって来る。そしてその先頭にはオテロがいた。

「一体何の騒ぎだ！サラセン人が来たのかそれともトルコ人になってもなってしまったのか」

この騒ぎに怒っての言葉だった。

「イヤーゴ」

「はい」

オテロの前では実直な軍人になってみせる。

第一幕その六

「これは一体どういうことだ。知っていることを述べてくれ」

「それがですね」

誠実の仮面を被ってから話すのだった。

「私にはわからないのです」

「わからないだと」

「そうです。つい先程まで誰もが礼儀正しい友人達でありました」

「それが急に変わったのか」

「左様です」

その誠実な仮面で語る。

「それが急に。悪魔が取り憑いたかの様に」

「変わったというのだな」

「剣を引き抜いてそれからです」

「カツシオ」

オテロはイヤーゴの話聞いてからカツシオに問うた。

「御前は何故剣を抜いているのだ」

「申し訳ありません」

彼は謝罪するだけだった。

「返す言葉もありません」

「モニターノ、そなたは」

「私はこの通りです」

傷を見せての言葉だった。見れば腕を汚している。

「傷を」

「愚かな話だ。こんなことが起こるとは」

ここまで話を聞いておおよそのことがわかった。そのうえで顔を顰めさせる。そこに彼の妻であるデズデモーナがやって来た。黄金色の豊かな長い、波がかつた髪に青く澄んだ瞳は優しく眩い光を放っている。透き通る様な白い肌の上に絹の衣をまといそれが艶やか

な光沢を月の光の中に見せている。その顔は優しげでありながらも優美な気品と色気を漂わせている。そのデズデモーナがオテロのところにやって来たのだ。

「オテロ様」

「デズデモーナ、起きてしまったか」

「はい」

夫の問いにこくりと頷く。

「この騒ぎは」

「気にするな。カツシオ」

妻の姿を見て騒動を終わらせることにした。カツシオの顔を向けた。

「そなたの副官の任を解く」

「はっ」

カツシオは己の心の中を見せずオテロに己の剣を差し出す。イヤゴはそれを見てほくそ笑むのだった。

「勝ったな、まずは一勝だ」

「イヤゴ」

オテロは次にイヤゴに声をかける。イヤゴはすぐに実直な仮面を被ってオテロに対する。

「はい」

「御前は一隊を率いて街に向かえ」

「街にですな」

「それで平和を取り戻せ。いいな」

「わかりました」

イヤゴは一礼してから一部の兵を連れてその場を後にする。去る間にほくそ笑む顔になったがそれは誰も見はしなかった。闇の中で。

「そしてだ」

イヤゴが去ったのを見てからオテロはまた言う。

「モニターノを助けよ」

「わかりました。それでは」

「モニターノ殿」

残っていた兵達がそれに応じてモニターノを左右から助ける。彼はその兵達に助けられながら城の中に向かう。オテロは続いて他の者達にも指示を出すのだった。

第一幕その七

「他の者はそれぞれの家に帰れ。わしは城壁に人影がなくなるまでここで見ておく」

「はい」

「それでは」

他の者達はオテロに一礼してからその場を後にする。場に残ったのはオテロとデズデモーナだけになった。オテロはここに至りようやく落ち着いた顔になった。それで言うのだった。

「暗い夜の中にわしの怒りの心もあらゆるざわめきも消える。夜の抱擁の中に静けさを取り戻したのだ」

「静けさをですな」

「そうだ」

デズデモーナに対して答える。

「大いなる怒りの後に待っているのは大いなる愛だ」

「オテロ様」

デズデモーナはいとおしげにオテロに声をかけた。

「どれ程多くの苦しみと溜息、それに望みが私達を今に導いたのでしょう」

「憶えてはいない」

首を小さく横に振って述べる。

「もう。どれだけさえも」

「左様ですか」

「色々話したな」

「亡命中の生活や勇ましい出来事、それに長い間の苦しみを」

「そうだ」

妻のその言葉に頷く。

「私はその話に聞き惚れました」

「幾多の戦いがあった」

オテロは軍人だ。しかも叩き上げである。だからこそ多くの戦場を生き抜いてきているのだ。そのことを今思い出していたのだ。

「剣戟の響きに敵が死守する場所への突撃に。城壁を登る強襲に風を切つて飛ぶ矢」

「そして貴方の故郷のこと」

ムーア人である彼の故郷だ。

「惨い太陽が照らす荒地や熱の砂漠ですね」

「奴隷になったこともあった」

彼はそれも脱しているのだ。

「わしの話でそなたは熱い涙を流しその唇から溜息を出し」

「貴方の暗いこめかみの中に貴方の光り輝く美しい心を見ました」

「わしの心に祝福すべく栄光と楽園、そして星達が舞い降りてきたのだ」

恍惚として上を見上げての言葉だった。

「そなたはわしの不幸故にわしを愛しわしはそなたの憐れみ深い心故にそなたを愛した」

「私は貴方の不幸故に貴方を愛し貴方は私の心故に私を愛してくれました」

「そうだ」

妻のその言葉に頷く。

「死を、来るがいい。そしてこの抱擁のさ中に、この最高の時にこそわしを捉えるのだ」

「神が苦しみを消して下さり」

「この様な心の喜びを恐れる」

オテロのその引き締まった顔に微かに脅えが走った。嵐はもうとうの先になくなり空には星達が瞬いている。青い月が優しい光を放っている。

「この様な時はもう来ないのではないか」

「何故そのようなことを」

デズデモーナはそのオテロの不安を察して問う。

「気のせいか」

「きつとそうです」

清らかな笑顔と共に述べた。

「ですから。もう」

「そうだな。それでは」

「帰りましょう」

優しい声で夫を誘う。

「私達の愛の中へ」

「うむ。それでは」

「愛はどれ程年月が経っても変わるものではありませんから」

「そうだな」

夫として妻の優しい言葉を受けた。

「それではな」

「はい。それでは」

二人は静かにその場を後にした。もう夜は静まり騒ぎも消え失せていた。ただ星と月達はその紫苑の夜空にその輝きを見せていたのであつた。

第二幕その一

第二幕 偽りの誓い

城の中央に置かれた宮殿。ここは繁栄を誇るヴェネツィアのものらしく美麗で豪華に飾られている。とりわけその大広間は金と銀で眩く飾られ無数のキャンドルで照らされている。庭は左右対称であり紅や白の花々と多くの緑で彩られている。そのテラスで今イヤゴが友人の仮面を被り頂垂れているカッシオに声をかけていた。

「落ち込まれることはありません」

優しい声を出して彼に語っている。

「微力ながら私が協力させて頂きます」

「イヤーゴ、貴方が」

「そうです」

如何にも誠実そうに一礼してみせる。

「あのピアノカとの関係よりも戻りませんが、副官殿」

「お世辞は止めてくれ」

副官という言葉に反応して首を横に振って答える。

「私はそんな」

「まあ御聞き下さい」

それでもイヤーゴはカッシオに言うのだった。

「総督ですが」

「うん」

オテロのことである。

「あの方は今ある將軍の指揮下にあります」

「將軍？」

「そうです、奥様です」

つまりデズデモーナのことである。

「総督はあの方に全てを捧げております。あの方に頼めばきっと」

「どうなるのだ？」

「奥様は大変お優しいお方」

デズデモーナの心もまた既に知っているのだった。

「ですからきつと」

「そうか。だが」

しかしここでカツシオにとって問題があった。

「どの様にしてあの方とお話したものか」

「それも御安心を」

丁寧な笑顔で述べた。

「私の妻は奥様にお仕えしております」

「そうなのか」

「左様です。ある木陰でいつも休まれるとのこと」

「ふむ。木陰で」

それを聞いたカツシオの顔が僅かだが晴れやかになる。

「そこで待たればいいのです」

「その木陰は」

「あちらです」

向こうの木陰を指差すのだった。

「あそこにいつもおられます」

「わかった、あそこだな」

「さあ。お行きなさい」

ことさら優しい声をカツシオにかける。

「救いの道が貴方に開かれています。その道に」

「わかった。ではそうさせてもらつよ」

「はい」

カツシオはかなり救われた顔で一礼してイヤーゴの顔を後にする。

するとその瞬間にイヤーゴの顔が一変するのだった。

「行け！」

悪魔の顔になった。まるで心の奥底から湧き上がるようにしてその顔になったのだった。声や口調までもが悪魔めいたものになる。

するとそれまで穏やかだった空も突如として暗雲に覆われ雷が蛇の

様にその空で蠢きだした。

「御前を誘う悪魔に従いな。一つ言っておこう」
もついなくなつたカツシオに対して言う。

「その悪魔こそがこの俺なのだ。俺は信じているのだ、己の中にいる無慈悲で容赦のない神を」

その言葉こそイヤーゴの信条だつた。今それを一人哄笑しつつ語る。

「俺は信じるのだ、己の姿に似せて俺を創つた無慈悲な神を。俺は怒りに任せてこの神を呼ぶのだ。俺は卑しく卑劣だ。何故なら」

邪な言葉が続く。

「俺は人間だからだ。だから俺は極悪非道で残忍なのだ。俺はそれを教会に入る若後家が神を信じるように俺の中の悪を信じているのだ。そして」

さらに言つ。

「正義も正直者も嘲笑すべき道化だ。涙も接吻も眼差しも栄誉も」

世の美德を罵りだした。

「犠牲も何もかもが偽りだ。人は赤子から屍に至るまで邪悪な運命の戯れで他の者を散々笑い者にした挙句に死ぬ。それから」

この言葉は。人の言葉ではなかつた。

「死は何もない。天国なぞない。邪悪だけがあるのだ」

こつ語る。するとそこにカツシオが来た。するとすぐに悪魔の素顔を消してまた誠実な友人の仮面を被るのだった。その仮面でまた優しげにカツシオに声をかける。

第二幕その二

「カツシオ」

「ああ」

「あの方が来られましたよ」

「今来たのか」

「探されていたのですか？」

「ああ」

イヤーゴの言葉に答える。

「そうか。今だったか」

「私の妻もいます」

こうカツシオに述べる。見ればその木陰にもうデズデモーナともう一人女がいる。赤い髪と緑の目をした小柄な女であった。

「エミールリアが」

「わかたも。じゃあ」

「はい、どうぞ」

彼が行ったのを見るとまた悪魔の顔に戻って呟く。

「後はここにあの黒いのを連れて来てだ。それから少しの微笑みだけで話が来るな」

こう呟いてオテロを探そうとしたところでそこでオテロを見つけるのだった。

「丁度いいところに。悪魔が俺をみちびいているのだな。それではすぐにまた誠実の仮面を被ってオテロの前に向かう。そこで考える顔を作りながら俯いて呟くのだった。

「困ったな」

「どうした、イヤーゴ」

「あつ、これは閣下」

演技を続ける。軍人としての敬礼をしたのだ。

「何かあったのか。むっ？」

イヤーゴが顔を上げてすぐに視線をあらぬ方に向けたのでそちらを見た。

「あれはカツシオか」

「そうですね。見たところ」

イヤーゴはいぶかしむ顔で述べた。

「閣下のお姿を見て急いで逃げていますな」

「だとしたら何故だ？」

オテロはそれをいぶかしむ。いぶかしむその心に早速イヤーゴが囁くのだった。

「あのですね、閣下」

「何だ」

「閣下が奥様をお知りになられた頃彼は既に奥様を存じておられましたね」

「ああ、そうだ」

何気なくイヤーゴに答える。

「それがどうかしたのか？」

「いえ、別に」

誤魔化した。芝居で。

「ただ。思い過ぎいですね」

「いや、それでもいい」

イヤーゴの計算通りオテロはそれに乗るのだった。それを見て心の中でほくそ笑む。

「閣下はカツシオ殿を信頼しておられますね」

「勿論だ」

副官としての任務を解いてでもある。

「あの者はわしが妻を見初めていた頃から度々妻にわしからの贈り物やカードを届けてくれている」

「左様ですか」

「そうだ。誠実ではないのか？」

「誠実だと」

あえてオテロの心に引つ掛かるように彼の口真似をするのだった。

「御前は何か言いたいのだ、一体」

「何が言いたいと、私が」

「わしの口真似をしているな」

「いえ、それは」

オテロが次第に不機嫌になっていつているのを見ている。だがそれは心の中で収めている。

「御前は何か隠している。何か凶悪な獣をな」

「まさか」

「いや、言っただけではないか」

少しずつ不安を感じながらイヤーゴに問う。

「さっき聞いたのだ。困ったな、と呟くのを」

「さて」

「聞こう」

不安を自分でも感じながらまたイヤーゴに問う。

「しかもわしがカツシオの名を呼ぶと顔に暗いものを見せる。何故だ？」

「それは」

「今までの様にわしを慕ってくれているのなら」

「それは否定しません」

わざと恭しく一礼してから述べる。ここでは礼儀正しくする方がいいとわかっていてだ。その方がオテロがイヤーゴに話し易いとかつているのだ。

「その通りでございます」

「それではだ。話してくれ」

さらにイヤーゴに突っ込みを入れる。

「御前が思っていることを。意地の悪いものでも悪意のあるものでもない」

「貴方はその掌の中に私の心の全てを持っておられるのですが」

「そうなのか」

「そうです。そしてですね」

そつとオテロの耳元に近付いた。音もなく。そのついで彼の耳に
小声で囁くのだった。

第二幕その三

「閣下」

「何だ」

「嫉妬には用心なさいませ」

「嫉妬にか」

「それは陰気で青黒く盲目の猛毒を持った悪蛇です
よく知っているからこそその言葉であった。」

「その毒で激しい苦痛が胸を引き裂くのです」

「恐ろしい毒だ。いや」

「ここでオテロは一旦考えを変えた。」

「悪戯に疑うことは何の役にも立たない」

「その通りです」

「疑う前に調べ、疑いの後に証拠をだ。そして証拠の後で
言葉を続けているうちにふと呟いた。」

「わしは最高の法律を持っているではないか。愛というものを」

「なりませんぞ、閣下」

「また囁く。止めるのはこの場合逆効果と見抜いたうえで。」

「そう話されることは。ですが」

「ですが」

「誠実で高貴なお育ちの方はえてして騙されやすいもの」

「まさか」

「いえ、そうです」

「また言うのだった。」

「奥様の御言葉をよく聞かれることです」

「デズデモーナのか」

「そう、細かく。一言で信頼を取り戻しもしれば疑いを証拠立てる
ことになりません。さあ」

指差す後ろで歌声が聞こえる。そこにいるのはデズデモーナだっ

た。庭の大きな中央のアーチのところにいる。周りにはキプロスの乙女や子供達がいる。彼等は楽器を奏で歌っているのだった。

「奥様、この曲はどうでしょうか」

「ええ、いいわ」

デズデモーナは優雅に笑って彼女達に答える。そこに水夫や島の男達も来て歌いだす。優雅さと勇壮さがミックスされた。

「そよ風が吹く時歌が暢気に流れてきて」

「貝や真珠、珊瑚を捧げ」

「花を胸から雨の様に」

「まなざしの光り輝くところ」

デズデモーナは優雅に彼等の曲を聴いて優美に微笑んでいる。オテロもそれを見て満足そうに微笑んでいた。

「いい歌だ。妻に相應しい」

「全くです」

イヤーゴも善き批評家になりその歌を評する。

「和む歌ですな」

（しかしだ）

心の中では別のことを語るのがイヤーゴであった。ここでも。

（それももうすぐ終わりだ。俺は御前等のこの甘い調べを打ち砕いてやる）

歌が終わりデズデモーナは彼等に菓子や花、それに金貨を贈り物として与えその場を立った。そして彼等やエミーリアと共に先を進むとオテロの前に来たのだった。

「こちらにおられましたのね」

「うむ」

ここでは顔を変えずに妻に応える。

「今は仕事の休憩にな」

「左様でしたか。ところで」

デズデモーナは安心しきった顔でオテロに言ってきた。

「貴方の御不興を蒙った方の御願いを持って来たのですが」

「わしのか。誰だ」

「カツシオ様です」

優雅な笑みと共にオテロに述べる。

「御存知ですね」

「無論だ。ところでだ」

イヤーゴの言葉を思い出しながら妻に問う。

「さつき樹の下でそなたに会っていたのは彼だな」

「はい」

何の隠し事もなく応えた。

「あの方の真剣な御願いを聞きましてそれで私も御願い致します」

「駄目だ」

しかしオテロは彼女の言葉を一言で断った。

「今は駄目だ」

「何故ですか？」

「どうしてもだ」

怪訝な顔になった妻にまた告げた。

「わかったな」

「オテロ様」

デズデモーナはここでオテロの顔が強張り額から汗が流れていることに気付いた。目の光も不吉に揺れ動いていた。

第二幕その四

「お顔が」

「わしの顔がどうした」

「お声も」

オテロの声にも気付いた。

「揺れておられますが。どうして」

「何でもない」

「いえ」

オテロの言葉に反してハンカチを取り出した。それで彼の額を拭こうとする。

「これで汗を」

「その必要はない」

「あつ」

手を払うとそれでハンカチが落ちた。

「オテロ様、どうして」

「………何でもないので」

こめかみを震わせながら答えた。

「放っておいてくれ」

「オテロ様………」

困惑した顔になる妻を置き踵を返してその場を後にしようとする。しかし背を向けたまま止まるのだった。ハンカチはエミーリアが手に取るがそこにイヤーゴが来た。

「頼みがあるのだが」

「何だい、御前さん」

エミーリアは夫に顔を向けて問うのだった。ハンカチは手に取ったままだ。

「そのハンカチをくれ」

「ハンカチをかい」

「そうだ」

「ちよつとこれは駄目だよ」

彼女は夫の言葉を断ろうとする。

「奥様が大事にされているのだし」

「それでもだ。ちよつと用があるのだ」

「用が？何だい？」

「実はな」

物静かな夫の顔で述べる。

「友人が香水を持っているのだ」

「香水をかい」

「門外不出の品だがそれを少しだけ使つてくれるそうだ」

「ああ、それなら話がわかるよ」

エミーリアもまた夫の素顔を知らなかった。知っているのはイヤ

ーゴ自身だけだ。

「奥様にその香水の香りをつてわけだね」

「特別にトルコから取り寄せたものらしい」

この時代はトルコの方が遥かに文化も文明も進んでいたので香水

もまた進んでいたのである。

「それをな」

「わかつたよ。それじゃあ」

納得して夫にハンカチを手渡す。その横ではデズデモーナが困惑した顔で背を向ける夫に対して声をかけていた。

「私は貴方の憤ましやかで大人しい妻です。ですが貴方はそうして背を向けられて」

「わしは色も黒く歳も取ってしまった」

オテロは呟いていた。デズデモーナに背を向けたまま小さな声で

「それはわしが世に疎く巧妙な愛の罠を知らないということもあるからだ」

「私は貴方を愛しています」

デズデモーナの必死の言葉は続く。

「ですから貴方の御心も」

「さて、これでよし」

イヤーゴは妻からハンカチを受け取ってほくそ笑んでいた。

「これでな。また一つ駒を手に入れたぞ」

「わしの心は破れ泥に塗れ黄金の夢を見る」

「さて、これで奥様も満足して頂けるわね」

「オテロ様、どうか」

「………後でだ」

オテロは結局振り向かなかった。

「今は一人になりたいのだ」

「………わかりました」

デステモーナも頷くしかなかった。彼女はエミールリアと周りの者達に慰められつつその場を後にする。イヤーゴはオテロの後について行く。彼は城の中で一人頂垂れていた。

「わからん」

「よし」

イヤーゴは頂垂れるそのオテロを覗き込みながら頷いていた。

「これでもう毒が回ったぞ」

「何が何なのか」

「それではだ」

イヤーゴはオテロが頂垂れるその横でハンカチを己の服の中に収めた。収めるその顔は悪鬼のものであった。

第二幕その五

「後はあの男のところへ隠しておくか」

「不貞を働いたのだ」

オテロはその中で呟いている。

「わしを裏切ったのだ」

「よし、苦しむのだ」

そんなオテロをみてほくそ笑む。

「その方が毒がよく回るからな」

「閣下」

また実直な軍人の仮面を被ってオテロに応える。

「そのことはお考えなさるな」

「………黙れ」

オテロの声はこれまでになく暗いものになった。

「はっ!？」

「黙れと言っているのだ!」

今度は叫ぶのだった。イヤーゴに顔を向けて。

「ここを去れ。貴様はわしを十字架にかけた。あらゆる恐ろしい侮辱よりもさらに恐ろしい侮辱は邪推だ。貴様はそれをわしに吹き込んだのだ」

「そうでしょうか」

「自覚がないのか。だが言おう」

オテロは言葉を続ける。

「妻が人知れず淫らな悦楽に耽る時わしの胸は不安に慄いたか。いや、わしは大胆で陽気で夢中だった。あの者にカッシオを感じることはなかった」

カッシオについて語る。

「あの唇にも。だが今は」

そして言う。

「さらばだ、全ての神聖な思い出よ！」
天に向かつて叫ぶ。

「心の高貴な法悦よ。輝かしい軍隊も勝利も尊敬の軍旗も」
彼にとつてはどれも誇りそのものだった。軍人である彼にとつては。

「飛び交う矢も駆け行く馬も。響き渡るラツパも雄叫びも歌も。これがオテロの栄光の終わりだ！」

「ですから閣下」

イヤーゴは善人の顔で彼に声をかける。

「お心を」

「黙れ、悪党が！」

またオテロは叫ぶ。

「妻が不義を犯したというその証拠を持って来い」

「証拠をですか」

「そうだ。いいか、逃げるな」

血走った目で彼に告げる。

「御前を助ける者はいない。わしはこの目で見える確かな証拠を欲している」

「確かな証拠を」

「そうだ」

それをまた言うのだった。

「さもなければ貴様の頭上に恐ろしい雷が落ちるだろう。いいな！」

ここまで言うといヤーゴの喉を掴んで地面に叩き落した。だがイヤーゴは冷静なままで立ち上がりながらオテロに対して言葉を返すだけであった。

「神よ」

敬虔なふりをするが神の名を出すその口の端は微かに歪んでいる。

「私を御護り下さい。今は正直は災厄であるようです」

「正直だと」

「そうです」

彼はまた実直な男のふりをするのだった。

「ですからこれで。私は御暇致します」

「いや、待て」

オテロはそのイヤーゴを呼び止めた。

「御前は正直者なのだったな」

「嘘吐きの方がましでした」

彼は言う。

「これでは」

「わしは妻が誠実であることを信じている」

オテロはこつ前置きする。

「しかしそれと共にその逆も信じる」

「その逆もまた」

イヤーゴはオテロに言葉を返した。

「左様ですか」

「御前についても同じだ」

オテロはイヤーゴに対しても言うのだった。

「御前が正直であることも嘘吐きであることも信じている。だからだ」

「だから」

「証拠が欲しいのだ」

こつ告げるのだった。

「何としてもな」

「ですから閣下」

オテロを気遣うふりをして言う。

「ご不安を抑えて。二人が抱き合っている場面をこらんになられたいのですか？」

「それは」

「それは難しい企みですな」

イヤーゴはそれは断る。

第二幕その六

「難しいだと」

「そうですね。その様な汚らわしい証拠が貴方の目に触れないとする
とどの様な確証を望まれるのですか？」

「それは」

オテロはこう言われると返答に窮した。どう答えていいかわから
なかった。

「若し分別が真実を導くのなら私はある推察を申し上げます」

「推察だと」

「左様です」

恭しく頭を垂れて述べる。

「それは若しかすると確実な証拠になるかも。それでも宜しいです
か」

「それは」

「如何でしょうか」

オテロの耳元で囁く。

「それは」

「言ってみよ」

イヤーゴから顔を背けながら答えた。

「それならな」

「わかりました。それでは」

イヤーゴはそれを受けてオテロに対して話をはじめのだった。

「夜のこととどございました」

「夜か」

「はい、前の戦の時のことです」

その時のことだと創作する。

「私と彼は共に寝ていましたがその時に途切れ途切れの言葉を聞い
てしまったのです」

「言葉をか」
「左様です」
彼は答える。
「唇は燃える情熱の夢に浸り無上の心の喜びを表していたのです」
「喜びをか」
「その通りです。奥様の御名前を口にしていました」
「あれのか」
デズデモーナと聞いてその顔を強張らせた。
「あれの名をか」
「私達のことは知られてはならぬと。慎重に用心しよう」と
「慎重にだと」
「この世ならぬ法悦が私に溢れていると」
「何と。法悦をか」
「そう。そして」
彼はさらに述べる。
「甘い苦悩は一層情熱的に。それで語るのです」
「何ということだ」
「そして貴方の御名前を」
「わしの」
オテロは己のことが言葉に出て顔を強張らせる。
「わしのことを」
「貴女をムーア人に与えた残酷な運命を呪いますと」
「おお！」
「ここまで聞いて遂に叫ぶ。」
「世にも恐ろしい話だ！」
「ただ夢のことを申し上げただけですか」
「夢は事実を暴露するものだ」
オテロはそれを知っていた。そう考えていた。
「夢が一つの証拠を示しているようですがまた別の手があります」
「別の手が」

「そうです」

またオテロに述べる。

「閣下」

「うむ」

イヤーゴの話聞く。聞かすにはいられなかった。

「貴方は奥様にハンカチをお渡ししましたね」

「そうだ。あれはわしが妻に最初に与えたもの」

オテロはそれをイヤーゴに言う。

「ハンカチを御覧になったことはございませんか」

「あるが」

「最近です」

それをオテロに述べた。

「最近は。どうでしょうか」

「何を言っているのだ」

「私はあのハンカチを見たのです」

既にそのハンカチを持っているからこそ言えるのだった。

「彼が持っているのを」

「またしてもか！」

オテロはそれを聞いて天を仰いで叫んだ。

「またわしは！恐ろしいことを知った！」

「閣下！」

「わしの心は氷となった。そのここで今わしの虚しい愛を全て捨てる。毒蛇の如き憎悪がそのかわりに心の中を支配していくのだ！」

叫びながら一旦膝をつき。それからまた立ち上がって天を仰いで叫ぶ。

「わしはこの大理石の様な石にかけて誓おう」

窓から空が見えていた。その空は暗澹としており先程の晴れやかな世界が嘘のようであった。

「鋭く閃く稲妻にかけて！死が迫り破壊をもたらす暗い海にかけて！」

不吉なものに対して誓っていた。

「わしが掲げたり差し伸べるこの手が激しい怒りと恐ろしい衝動に間も無く閃き輝くだろう」

「閣下」

そのオテロにイヤーゴが言う。

「何だ」

「私もまた」

「誓うというのか」

「はい、閣下の為に」

悪魔の素顔を隠してオテロの側に来た。

「それを誓いましょう。私を照らし広い大地と全てを生氣付ける太陽が私の証人です」

イヤーゴはそんなものは信じてはいない。だからこの誓いは紛れもなく偽りである。オテロも誰もそれを知らないのであった。

「ですから。貴女に全てを捧げましょう」

「わしに誓ってくれるか」

「はい」

偽りの誓いを今述べる。

「ここに。貴方の意志が恐ろしい仕事の為に固められますように」

二人は今誓い合う。暗きものを前にして。オテロは真だったがいヤーゴは偽りだった。しかしそれもまたイヤーゴだけが知っていることだった。何もかも。

第三幕その一

第三幕　ハンカチの罫

城の大広間。奥にテラスがあるこの豪華な部屋の執務用の机にオテロは座っている。その横にはイヤーゴが毅然として立っている。その彼に一人の将校が報告していた。

「以上です」

「そうか」

オテロはまず彼の言葉に頷いていた。

「遂に来られたのだな」

「間も無くこちらに来られます」

将校はこうも述べた。

「大使御一行が」

「はい」

またオテロの言葉に応えてきた。

「その通りです」

「よし、わかった」

オテロはオテロとしてその将校の言葉に応えた。

「では下がれ」

「わかりました」

将校は敬礼をして応えその場を後にした。これで終わりだった。

オテロは彼を見届けるとイヤーゴに顔を向けた。彼はそのイヤー

ゴに対して問うのだった。

「それでだ」

「先程のお話ですか」

「そうだ」

イヤーゴに対して頷く。

「カッシオを呼ぶのだな」

「そうです」

イヤーゴは誠実な顔でオテロに対して頷いてみせた。

「ここに連れて来たならば」

「どうするのだ？」

「その時はお任せ下さい」

賢者の顔を見せる。だがこれもやはり仮面なのだ。

「私めにそれで宜しいでしょうか」

「わかった。それでは」

「それですね」

イヤーゴはさらにオテロに話を続ける。

「総督は」

「わしはどうすればいいのだ？」

「お隠れになって下さい」

そうオテロに告げてみせた。

「あのテラスのカーテンの裏にでも」

「むっ、確かに」

そのテラスの方を見て言うオテロだった。

「あの場所は。隠れるには都合がいい」

「はい。ですから」

誠実を装ってオテロに話し続ける。

「あちらに。それで宜しいですね」

「わかった。ではな」

「はい」

またオテロに頷いてみせてから一つスパイスを混ぜるのだった。

「彼の仕草をよく御覧になられて下さい」

「うむ」

「ハンカチもまた」

それがスパイスだった。しかもそれは胡椒よりも効くスパイスだった。それをオテロに振りかけたうえでようやく話が終わった。イヤーゴが敬礼をして部屋を後にしたがそこでまた出て来たのはデズデモーナだった。彼女はおずおずとオテロのところに来て彼に対し

て声をかけるのだった。

「オテロ様」

「どうした？」

まずは普通の顔でオテロに応えた。

「御機嫌は如何でしょうか」

「うむ。いい」

こう答えてはみせる。

「いつも通りの美貌だな」

「有り難うございます」

オテロのその言葉に穏やかな笑顔で微笑む。

（しかしだ）

彼は心の中で思うのだった。

（よからぬ企みを持つ優しい悪魔が美しい象牙色の小さな爪を持っているのだ）

デズデモーナのことである。

（祈祷や熱情に優しい物腰を装いながら）

「それで私は」

またデズデモーナは言うのだった。

第三幕その二

「貴方にこの心を捧げます」

「それです」

また話すのだった。

「カツシオ殿のことですが」

「むっ」

その名を聞くと顔を顰めさせる。無意識のうちに汗さえ出る。

「どうされました？」

「いや、何でもない」

だがその心の揺れは隠すのだった。

「気にするな」

「ですが」

ここでデズデモーナはハンカチを出す。しかしオテロはそのハンカチを見てその顔にさらに不吉なものを及ばせた。そうして言うのだった。

「待て」

「？何か」

「ハンカチだ」

顔を強張らせて妻に対して言うのだった。半ば叫びながら。

「ハンカチを出せ」

「ハンカチ！？ですから」

「違う」

強張った声で言う。

「わしが御前に最初に与えたそのハンカチだ」

「そのハンカチですか」

「そうだ。それを出すのだ」

妻を見据えながらそう問い詰める。

「よいな」

「それは持っています」

「何っ!？」

その言葉を聞いたオテロの顔がさらに強張る。半ば立ち上がった。
いた。

「よいか」

「は、はい」

オテロの剣幕に怯えながらも応える。

「あれをなくしたら承知できぬ。ある強い力を持った魔女が神秘の糸で織ったものなのだ」

「神秘の糸で」

「そうだ」

彼は言う。

「魔除けの素晴らしいまじないがかけられている。若しなくしたり人にやったりすると禍を招くのだぞ」

「そうだったのですか」

「本当だ」

妻にはつきりと答える。

「それでどうしたのだ？」

「それは」

「答えよ」

不吉な顔で妻を問い詰める。

「どうしたのだ、そのハンカチは」

「持っています」

「持っているのだな」

「はい」

少なくとも彼女はそう思っている。なくしたことに気付いていないのだ。

「それは確かに」

「では探せ」

汗を流し血走った目で迫る。

「わかったな」

「は、はい」

「話はそれからだ」

「あの、それでは」

デズデモーナは困った顔で妻に対して言うのだ。

「カツシオ様のことは」

「言ったな。それからだ」

言葉は突き放したものになった。

「それにだ」

「それ………に!？」

「御前はわしの何だ」

その血走った目でデズデモーナに問う。問い詰める。

「何なのだ。言ってみよ」

「オテロ様の忠実な妻です」

答えはこうであった。これしかなかった。

「そうだな。では誓え」

「誓います」

「地獄でだ」

妻を見る顔が呪わしげになる。それはデズデモーナが今まで見たものではないしオテロ自身も今まで浮かべたものではなかった。

「地獄で………」

「そんな、私は」

「わしは御前を汚れた女だと思っている」

「そんな………」

「では聞く」

あらためてデズデモーナに対して問う。やはり問い詰めている。

第三幕その三

「潔白だというのか」

「そうです」

彼女はそのつもりだった。しかし今のオテロはそれを信じる事ができなくなっていた。毒のせいで目も心も見えなくなってしまっていたのだ。

「どうされたのですか、オテロ様」

恐怖に震える顔で夫に問う。

「急に。そのような」

「悪魔の戯言だ」

「悪魔ではありません」

「それも否定する。」

「私の心は神が御存知です」

「戯言だ。地獄が待っている」

「それも否定するのだった。」

「これ以上は言わぬ。下がれ」

「どうされたのですか、本当に」

普段とはあまりにも違う夫に対して問う。

「貴方は。今の貴方は」

「わしは何でもない」

「違います。今の貴方の御心は」

「デズデモーナは感じていたのだ。」

「悲しみを感じます。そして私はその苦い悲しみの理由を知らない。何が私の罪なのか：

「それをわしに問うか」

また険しい顔を見せる。

「己の百合の様な白い額に記された御前の邪悪な罪をな」

「邪悪な罪を」

「御前は自分が汚れた娼婦でないというのか」
遂にはこうまで言うのだった。

「自身自身を」

「いいえ」

真つ青な顔で首を横に振って答えた。

「私はそのような」

「まだシラを切るのか」

「主の信仰の心のままに」

「黙れ！」

遂にオテロは立ち上がった。そしてその激昂を妻にぶつけた。

「それ以上言うな。もう我慢できぬ」

「ああっ！」

デズデモーナの手を掴んだ。そしてそのまま扉の方まで行き。

無理矢理彼女を部屋から押し出した。それから扉を力任せに閉める。それでもう妻の声も姿も彼の前から消えた。彼はその扉から離れると大きく嘆息して部屋の中央に来たそのうえで言うのだ。

「あらゆる悲惨な恥ずべき不運がわしを襲う」

己が不運に囚われたと嘆くのだった。

「戦場で勇敢に戦い手に入れた勝利は廃墟となり苦悩と恥辱の残酷な十字架を背負うことになった。穏やかな顔で神の意志に従い見果てぬ夢は奪われた」

ただひたすら嘆く。

「太陽も微笑みを与えてくれた光も消え去り薔薇色の慈悲深き微笑みを持つ精霊達も聖なる顔を恐ろしき地獄の不吉な仮面で覆い。何もかもが罪に包まれていく。何故ここまで苦しまねばならないのだ」
そう嘆いていると。扉が開きイヤーゴがやって来たのであった。

「それで証拠は」

「お待ちを」

忠実の仮面をここでは被っていた。

「間もなく来ます」

「そうか。間も無くか」

「はい、ですから」

そうしてオテロに言うのだった。

「お隠れを」

「カーテンの裏にだな」

「そうです」

それをまた告げる。オテロはそれに頷きテラスの方に向かいその柱廊を覆うカーテンの裏に隠れた。彼が隠れると同時にカッシオが入って来たのだった。

「閣下」

「おられませんよ」

イヤーゴが彼を出迎えるのだった。

第三幕その四

「休養ができてまして」

「そうだったか」

「はい。ところでどうしてこちらに」

「奥様がここにおられると思って」

イヤーゴに答えるが妻の名を彼の口から聞いたオテロは無言で顔を強張らせた。

「やはり」

「もう一度奥様とお話したいのだ。私がお許しを得られるかどうか」

「まあ待たれることすな」

「待つのか」

「はい。気分を転換させて」

優しく親しげにカッシオに声をかけながら彼を柱廊のところに連れて行く。オテロがいるのをはつきりとわかつてのことである。そこで足を止めてカッシオに対して問うのだった。

「ところでですね」

「何だ？」

「あの方のことですが」

「あの方が」

「そう、あの方です」

親しげに笑いながら友人の仮面を被ってカッシオに声をかける。

「あの方のことですが」

「ああ、あいつか」

「あいつだと」

オテロはカッシオがデズデモーナをあいつと言ったと思った。思っただのだ。

「実はな」

「ええ」

カツシオは嬉しそうににやける。そのにやけた顔もオテロは見ていた。

「悪党が勝利を誇り笑う。あの笑いには我慢できない。だが」

それでもオテロは我慢するしかなかった。だから彼も自重するのだった。

「口付けにも泣き言にも疲れてしまったよ」

「おやおや、それは」

カツシオは今度は泣きを入れるがイヤーゴはそれを笑ってフオロ一する。

「他の方に心移りしたとか？」

「違うよ」

「では」

ここであえてオテロに聞こえないように小声で尋ねるイヤーゴであつた。

「ピアノカさんのことは」

「それはだ」

「ええ」

カツシオも自然と小声になる。オテロはそれを聞き取る為にそつと二人に近づく。カーテンに隠れながら。イヤーゴはオテロのその動きを横目で見ていた。

「それで贈り物は」

「ハンカチにしようかな」

「ハンカチですか」

わざとオテロが聞き取れるような声を出す。それを聞いたオテロはさらにいたたまれなくなり二人に近づく。イヤーゴはそれを見届けてまた小声になるのだった。

「そうだ、ハンカチだ。そういえば」

「そういえば」

また小声に切り返す。二人は囁き合うようになっていた。

「実はだ」

「どうされました？」

「昨日私の部屋にこんなハンカチがあった」

「むっ」

カッシオが取り出してきたのはあのハンカチだった。それをイヤーゴに見せる。

「このハンカチだ」

「ふむ」

（よし）

イヤーゴは心の中では違つことを思っていた。

（きているな。よし）

「これはまた幸運な」

イヤーゴはカッシオには相変わらずの津きり笑いを浮かべてまた言うのだった。

「素晴らしい。これは」

「よかつたらあげるけれど」

「頂けるのですか？」

「ビアンカの好みではないからね」

彼がそのハンカチを受け取らない理由はそれであった。

「だから。別にいいよ」

「好みではないのですか」

「あいつは赤いハンカチが好きなんだ」

見ればそのハンカチは白い。つまり全くのアウトゾーンなのだ。

「だから。別にいらない」

「そうですか」

「だからあげるよ」

これはイヤーゴへの親切であった。彼もまたイヤーゴを自分を大事に思ってくれる有り難い友人だと思っていたのである。仮面に騙されていたのだ。

「わかりました。有り難うございます」

「うん。それでね」
ハンカチを手に取るとそれを後ろにやる。わざとオテロに見せた。

第三幕その五

「間違いない」

オテロはそのハンカチを見て呟く。

「全ては消え去った。愛も苦惱も」

デズデモーナが不義を働いたと確信したのだ。

「わしの心を動かすものは全て消え去った」

「蜘蛛の巣ですな」

イヤーゴはカッシオに語るふりをして自分自身に述べていた。オテロを嘲って。

「心が底に落ちて嘆き巻き込まれ死んでしまう」

「恋のことか？」

「夢中になり過ぎ見とれていると騙されて陥ります。有頂天になるのは」

「止めた方がいいか」

「忠告ですぞ」

穏やかな言葉で今度はカッシオに言う。

「わかつてるよ。けれど恋は」

カッシオはのろけて言葉を続ける。

「枷と針の不思議な美しさ。それがヴイー得るの糸を光に変えて軽やかに雲よりも白く雲よりも雪よりも白いもの」

「その通りです」

「おのれ」

オテロはハンカチを見ながらカーテンの裏で憤怒の顔で呻いていた。

「許さんぞ。何があっても」

「くれぐれも夢中になり過ぎないように。よいですな」

「わかっているけれどね。おや」

ここで城の外からラツパの音が聞こえてきた。それに返す形で大

砲の音が鳴る。イヤーゴはその二つの音を聞いて何があったかすぐにわかった。

「ヴェネツィアの船が到着しましたね」

「どうやらそのようだな」

「さて、それではですね」

「うん」

またイヤーゴの言葉に応えた。

「そろそろ総督も戻られますし」

「この部屋から去った方がいいな」

「そうです。ですから」

「うん、わかったよ」

にこやかに笑ってイヤーゴの言葉を受ける。

「それじゃあこれで」

「はい」

カツシオはイヤーゴに別れを告げて部屋を後にする。オテロは彼がいなくなってから慎重にカーテンから出て来た。その顔は憤怒で歪んでいた。

「どの様にして殺してくれよう」

「御覧になられましたな」

イヤーゴはその彼に憤怒の顔を向けて囁いた。

「あの男が笑っていたのを」

「うむ」

オテロは憤怒の顔のままにイヤーゴの言葉に頷いた。

「よくな」

「ではハンカチも」

「それも見た」

またイヤーゴの言葉に頷く。

「どれもこれもな」

「万歳！」

遠くから人々の歓喜の音がする。

「ようこそ来られた！」

「待っておりますぞ！」

「イヤーゴ」

オテロはテラスの外から聞こえるその声を聞きながらイヤーゴに
対して言うのだった。

「毒薬を用意しろ」

「毒薬ですか」

「そうだ」

「獅子の旗に栄光あれ！」

また後ろから声が聞こえる。

「それあの女を」

「いえ、それよりも」

あくまでオテロの忠実な部下を装って彼に話す。

「絞め殺す方がよいのでは」

「絞め殺すのですか」

「そうです」

耳元に来て囁く。心に染み渡らせるように。

「あの人の寢床で」

「寢床でか」

「罪を犯したその場で」

「そうだな」

オテロは暗い顔でイヤーゴの顔に頷いた。目は大きく出て額には
汗を見せている。

第三幕その六

「確かにその方がいいな」

「では私はカツシオを」

「あの男を殺すのだな」

「その通りです」

ここでも忠臣の仮面を被っている。

「閣下の為に」

「よし、それではだ」

オテロはイヤーゴの忠義に感じ入った。少なくとも彼はそう思った。

「そなたを今日からわしの副官にしよう」

「有り難き幸せ」

「うむ」

恭しく一礼しながら心の中でほくそ笑む。まずは第一の目的を果たしたことに満足したのだった。そのうえで言葉を続ける。

「それでは閣下」

「何だ」

「もうすぐ大使の一行が来られます」

それをオテロに告げるのだった。

「そうだな。お迎えせねば」

「そしてその場に奥様を」

「あれをか」

「そうです。奥様がおられないと何かと疑いがかかります」

「そうだな」

オテロとデズデモーナは彼女の父の猛反対とヴェネツィア中の驚きをもって迎えられたのだ。それだけによく知られた仲である。そのデズデモーナがいけないということはそれだけで疑いをかけるものだったのだ。

「ではあれも」

「はい。それでは」

こうして話はまとまった。イヤーゴは一礼しその場を後にしオテロも己の仕事に入った。城内の大広間は華麗な装飾で飾られていた。絹の白いカーテンに黄金色の像にギリシア神話の絵画が大きくかけられその絹の豪華な服を着た人々が集っていた。天井にはシャンクリラの光がある。そこで人々は貴族の服にマントを羽織った黒い髪的美丈夫を歓待していた。この大使はヴェネツィアの貴族でロドヴィーゴといった。

「ようこそ来られました閣下」

「お待ちしております」

オテロとデズデモーナが彼を出迎える。二人の後ろにはそれぞれ多くの者が並んでいる。イヤーゴやカツシオ、エミーリア達もそこにいた。

「はい、総督」

ロドヴィーゴもまたオテロにこやかに応えて一礼する。それからその手に持っている羊皮紙を開いて厳かにこう告げるのであった。「ヴェネツィア政府並びに元老院はキプロスの勝利の英雄に敬意を表します」

「はい」

「私は貴方に政府のメッセージを持って来ました」

「私にですか」

「そうです」

オテロに対して述べる。

「そして奥様にも」

「有り難うございます」

これは普通に文書にある言葉だったのだがオテロは今の言葉に眉を不吉に動かすのだった。しかしそれはロドヴィーゴには見えない。「貴女に神の御加護がありますように」

「有り難うございます」

デズデモーナはそれに一礼してからまた述べた。

「神様がお聞き届け下さいますように」

「奥様」

そのデズデモーナにエミリアが囁いてきた。

「御気分が優れないのですか？」

「それは」

デズデモーナは曇った顔でそれを言わない。しかしエミリアはまだ彼女を気遣っていた。

「気にしないで」

「左様ですか」

「閣下」

彼女達の前ではイヤーゴがロドヴィーゴに恭しく一礼していた。

彼の前ではあくまで実直な武人なのだ。その素顔は決して見せはしない。

「お久し振りです」

「君も元氣そうだな」

「はい」

ここでは親しげな話が交えさせられた。

「ところでカツシオ君は？姿が見えないが」

「総督の御機嫌を損じまして」

「うつむ。それはまた珍しい」

オテロが機嫌を損ねているということがだ。彼の中ではオテロはあくまで実直な軍人なのだ。

「閣下」

「奥様」

デズデモーナが出て来た。

「私はお許しがあると思っています」

「何だと」

それまでロドヴィーゴが手渡してくれた公文書を見ていたオテロの顔が不吉に震えた。

第三幕その七

「許しだと」

「今何と」

「いや、奥様」

事情を知らないロドヴィーゴが二人の間に入った。

「総督は文章を読まれているだけですぞ」

「そうですか」

デズデモーナはオテロの様子に顔をさらに真っ青にさせたがそれをまずは薄くさせた。

「まあ奥様」

「イヤーゴさん」

デズデモーナの前のイヤーゴの仮面は紳士のもだった。

「おそらくお許しが出ますので」

「そうですね。カツシオさんはいい方ですので」

「静かにしなさい」

不吉なオテロの響きがデズデモーナの耳に入った。するとデズデモーナの顔がまた蒼白になった。その蒼白の顔がオテロの目に入ると彼の中で何かが切れた。

「黙れ！」

「えっ!？」

「黙れと言っているのだ！」

いきなりデズデモーナに飛び掛って来たのだった。

「この悪魔が！」

「なっ、総督！」

ロドヴィーゴは今の事態に我が目を疑った。だが咄嗟にその手を動かして二人の間に入る。

「何をされます！」

「馬鹿な、オテロ將軍が！」

「これは一体！」

周りの者も驚きを隠せない。ロドヴィーゴはオテロの前に立って必死に止めている。

「落ち着かれよ、総督！」

「カツシオだ！」

オテロはロドヴィーゴに止められながら周りの者に対して叫んだ。

「カツシオを呼べ！」

「総督、何を為さるので？」

「決まっている」

問うたイヤーゴに対して言い返す。

「あいつが来た時のあれの様子を見てやる」

「左様ですか」

「しかしどうしたのだ」

ロドヴィーゴは今のオテロを見てまだ我が目を疑っていた。それを口に出す。

「閣下は。あのヴェネツィアの獅子は」

「さて」

イヤーゴはそれにはとぼけるだけだった。

「何が起こったのやら」

「何か知っているのか？」

「それがですね」

普段彼に見せている実直な軍人としての仮面での言葉だった。

「何も申し上げない方が宜しいでしょう」

「一体何が」

「来たな」

オテロは血走った目で周りを見回していた。そしてカツシオが来たところでその目を彼とデズデモーナに集中させた。そのうえでイヤーゴに対して告げた。

「あいつの心中を探ってくれ」

「わかりました」

実直に頷くイヤーゴであった。実直なふりをして。

「諸君！」

オテロは冷静さを何とかその身にかけながらその場にいる者達に告げてきた。

「統領は。我がヴェネツィアの元首は私を祖国に召還されます」

「まあそうだろうな」

これは昇進である。今度は本土で要職を務めるのだ。イヤーゴはそれがわかっているからこれを聞いても特に驚くことはなかった。

「御前は嘆くふりをしている」

「どうしてそんな……」

デズデモーナは今のオテロの言葉にまたその顔を蒼白にさせる。

「その様なことを」

「黙っていると言ったな」

「……」

こう言われて遂に黙るデズデモーナだった。

「そして」

デズデモーナを黙らせ酷薄な目を向けた後で顔を戻してまた周りに告げる。

「私の後任になるのは副官であったカツシオです」

「ちっ！」

イヤーゴはそれを聞いて素顔を出して歯噛みした。しかしこれは俯いていたので誰にも見えなかった。

「地獄に落ちろ。青二才が」

「それはここにありません」

ここでそれまで読んでいた公文書を出してみせた。

第三幕その八

「ここにある通りです」

「わかりました」

カツシオが最初にオテロに対して一礼した。

「その御言葉、慎んでお受け致します」

「見たな」

オテロはそのカツシオを一瞥した後でイヤーゴに対して囁いた。

「はい」

「恥知らずが。のぼせ上がっているようには見えないが」

「確かに」

イヤーゴもその言葉に頷く。

「見たところは」

「ここにある全てのもの」

オテロは告げながらまたデズデモーナを見る。彼女はすすり泣き続けている。しかしその彼女にまた冷酷な言葉を浴びせるのだった。

「そのまま泣いている。永遠にな」

そう言ってからまた言うのだった。

「それへの指揮権を彼に任せます」

これで言葉は終わる。するとすぐに彼のところにロドヴィーゴがやって来た。そのうえで彼はデズデモーナを横目に見ながらオテロに対して話すのだった。

「奥様を慰めて下さい。あまりにもお気の毒です」

「明日ですな」

彼はそれに答えずに呟くだけだった。

「私が出るのは」

「私？いや」

思わず言葉を訂正させようとするが間に合わなかった。また感情を爆発させてデズデモーナに対して叫ぶのだった。

「跪け。そして涙を流せ！」

「本当にどうなったのだ！」

デズデモーナの胸倉を公衆の前で掴んで床に叩きつけるオテロを見てまた呆然となった。

「これがあの……ヴェネツィアの獅子なのか」

「奥様……」

エミリアは咄嗟にデズデモーナのところに来て彼女を助け起す。必死に彼女を助けようとしていた。

「どうして」

デズデモーナはエミリアに助け起こされながら呟いていた。泣きながら。

「私は。どうしてこんな」

「何ということ」

エミリアはそんなデズデモーナを見て悲嘆と途方で目の前を真っ暗にさせていた。

「奥様はもう苦しみと悲しみで」

「運命は決まった」

カッシオは二人とは正反対に満面に笑みを浮かべていた。

「地獄から天国に。運命の頂点が無力な私に預けられた」

「ヴェネツィアに去るといふのか」

ロデリーゴはデズデモーナを見て齒噛みしていた。

「黄金色の天使は私の手の届かないところに」

「何があつたのだ」

ロドヴィーゴはオテロとデズデモーナを見てまだ呆然としていた。

「あのヴェネツィアの獅子が。そしてヴェネツィアの真珠が」

「オテロ様はどうされたのだ」

「何故この様なことが」

周りの人々も啞然としていた。その中でイヤーゴがここぞとばかりオテロに囁いてきた。

「ところで」

「何だ？」

「急がれた方がよいかと」

「急ぐのだな」

「そうです」

こつオテロに囁くのだった。実直なふりをここでもして。

「怒りは無用な悪ふざけ。力を奮い起こして立ち上がり仕事に努力を向けて下さい」

「仕事を」

「カツシオは私が」

また言ってきた。

「彼は自分の陰謀の罪を償い地獄に恥すべき心を飲み込まれるでしょう」

「わかった」

オテロはその言葉を受け入れた。

「ではその様に」

「今夜お知らせ致します」

そんな話をしていた。だがそれぞれの己の心の中の荒らしにさらされている周りのものは誰もそれに気付かない。その間にイヤーゴは今度はロデリーゴに近付いて囁くのだった。

「それですね」

「ああ」

彼はイヤーゴの言葉に顔を向けた。

第三幕その九

「勇気をか」

「そうですね。船は夜明けに出港です」

それをまずロデリーゴに言う。

「夜明けだな」

「そう、夜明けからカッシオが司令官」

これが前提となる。しかし前提は前提なのだ。

「ですが何か不祥事が彼に降りかかればオテロはこのキプロスに残ります」

「暫く留任ということだな」

「ですから」

「ですから」

「狩りの用意を」

心の奥底に毒を潜ませるような言葉だった。

「宜しいですね」

「わかった。それでは」

そして彼はイヤーゴの、悪魔の毒を今飲んだ。薬と思い。

「そうしよう」

「お手伝いしますので」

親友の仮面だった。

「その時はどうか」

「すまないな」

「もういい」

オテロは遂に周囲にも感情を爆発させた。暗い声だった。

「もういいのだ」

「！？何が一体」

周囲の誰もがまたオテロの様子に顔を怯えさせる。

「どうしたんだ、本当に」

「あれ程立派な方が。何があったのか」
「行ってくれ！」

周囲に対して叫んだ。

「何処なりとも。もう！」

「そうだな」

ロドヴィーゴが完全にオテロに呆れてしまい周囲に告げた。

「もう。今はな」

「オテロ様」

デズデモーナがそれでも夫を気遣って駆け寄る。しかしオテロはそんな彼女を突き飛ばす。そのうえでまたしても叫ぶのだった。もうそれは悲鳴だった。

「去れ！わしの前から！」

「よし、完全に終わった」

イヤーゴは取り乱すオテロの有様を見てほくそ笑む。

「毒が完全に回ったな」

「わしだけは自分から逃れることができない。血だ！」

オテロの取り乱した言葉が続く。

「卑しい思い！それがわしを苦しませる！」

「恐ろしいことだ」

ロドヴィーゴは首を横に振るばかりだった。オテロの有様を。

「もう去ろう。今の彼は」

「そうですね」

「少なくとも今は」

皆ロドヴィーゴのその言葉に従うのだった。悲しい顔で。

「去りましょう」

「もう」

「抱き合った二人を見るのか」

デズデモーナもロドヴィーゴとエミリアに護られてその場を後にする。カッシオもロデリーゴも。残っているのはオテロとイヤーゴだけだった。オテロは取り乱し続けておりイヤーゴは悪魔の顔で

彼を見ているのだった。それは嘲笑する悪魔の顔だった。邪悪な悪魔そのものだった。

「ハンカチだ」

オテロは言う。

「ハンカチ！ どうすればいいんだ！ ああ！」

遂に昏倒して仰向けに倒れこんだ。もう己の心の乱れに耐えられなくなったのだ。城の外から聞こえるヴェネツィアとオテロを讃える言葉ももう耳には入らない。イヤーゴはその仰向けに倒れ込んでしまったオテロを見下ろして笑う。やはり嘲笑する邪悪な悪魔の素顔で。

「誰が妨げることができよう。俺がこいつの額をこの踵で踏み潰すことを」

先の尖った靴を見ながら晒う。悪魔の笑いで倒れ伏すオテロを見下ろし続けていた。

第四幕その一

第四幕 オテロの死

デズデモーナの寝室。今そこにある祈祷台の前に白い寝巻を着たデズデモーナが座っている。その少し離れた場所に天幕ベッドがある。だが彼女はそこを水に祈祷台の前に座り込んでいる。髪を下ろしこの上ない悲しい顔で。

彼女の横にはエミーリアが控えている。デズデモーナを気遣って声をかけるのだった。

「奥様」

「ええ」

デズデモーナはエミーリアの言葉に応えた。エミーリアは心から彼女を心配していた。

「旦那様は」

「落ち着かれたみたい」

「そうですね」

デズデモーナの言葉を聞いてまずは安心したようだった。

「それは何よりです」

「床について待っているようにと仰ったのよ」

「左様ですか」

「それでね。エミーリア」

沈んだ顔のままエミーリアに告げた。

「何でしょうか」

「婚礼の時のガウンをベッドの上に広げておいて」

「ガウンをですか」

「ええ。それで」

さらにエミーリアに告げるのだった。

「聞いて欲しいことがあるのだけれど」

「何でしょうか」

「私は貴女より先に死ぬことがあれば私が着ていた服のどれかに包んで葬ってね」

「奥様、それは」

デズデモーナの今の言葉に不吉なものを感じずにはいられなかった。

「そんなお考えは追い払って下さい」

「私は悲しいのよ」

沈んだ顔でまたエミリアに言ってきた。

「昔のことだけれど」

「何でしょうか」

「昔家に一人の女中がいたの」

「女中がですか」

「バルバラといってね。綺麗な娘だったわ」

こうエミリアに語る。

「ある人を愛していたけれど捨てられて」

「捨てられて」

言葉が続ける。俯いたまま。

「いつも同じ歌を歌っていたの。柳の歌を」

「柳の歌ですか」

「単調なふしの歌だから覚えているの。それを思い出して」

静かに。その歌を歌いだしたのだった。

「寂しい荒野に歌いながら泣く悲しげに泣く女。柳よ柳よ」

こう歌う。

「女は腰を下ろし項垂れて。柳よ、柳よ。陰気な柳が私の花冠に」

「悲しい歌ですな」

「もうすぐ」

歌を止めて呟きだした。

「オテロ様がここに来られるのよね」

「はい」

デズデモーナの言葉に頷いた。

「その通りです」

「小川は花咲く丘の間を流れる。破れた心は呻き睫毛からは心の嘆きの苦い涙の波がほとぼしり出る。柳よ、柳よ、柳よ」

また歌いだした。

「歌いましょう。陰気な柳が私の花冠に」

さらに歌を続ける。

「小鳥達は暗い枝から甘い歌の方へ飛び下りて来るそしてその日富は岩も心を動かす程悲しくて。彼は栄光の為に生まれて私は愛の為に生まれて」

「愛の為に」

「ええ。バルバラはいつもこの歌を歌っていたのよ」

もうガウンは開かれベッドの上に置かれていた。既に。

「ところで」

「はい。何でしょうか」

「戸を叩いているのね。誰なの？」

「風です」

デズデモーナにはそれもわかっていなかったのだ。

「ただの風です」

「そう、風なの」

「さようなら、エミリア」

静かな声で述べた。

「さようなら」

「……はい」

エミリアはデズデモーナに一礼してその場を後にした。デズデモーナは一人になった。彼女は椅子から降りて祈祷台の前に跪いた。そのうえで祈るのだった。

第四幕その二

「恵み溢れる聖母マリア。貴女様は多くの妻達、乙女達から選ばれました。その貴女様から生まれた主よ。罪ある者の為に祈って下さい。弱く虐げられた者にも力ある者にも」

祈りは続く。

「不幸なる者の為にも侮辱に額を垂れる者の為にも邪悪な運命の下にいる者達に対しても。祈りを救いを御願いします。どうか」

そして最後に深い祈りを捧げた。それが終わってから立ち上がり寝台に入り眠りに入る。暫くすると部屋の中にオテロが入って来た。まずはテーブルの上に剣を置きそれから蠟燭を少し躊躇いを見せてから消した。それから寝台に近付きデズデモーナを見る。唇を噛み締めながら彼女の眠っている顔を見る。暫く彼女の顔を見たまま考え込んでいたがやがてその唇に三度接吻をした。それが終わってから顔を上げた。するとデズデモーナが目を覚ました。

「オテロ様？」

身体を起こしながらオテロに対して問う。オテロはその彼女を見ているうちに顔を見る見るうちに険しく不吉なものにさせていくのだった。

「祈りは済んだか」

「お祈りですか」

「そうだ。御前が何か罪を思い出したら」

彼は言う。

「神の恵みを願いすぐに祈るがいい」

「何故ですか？」

「急げ」

オテロはまた言い詰める。

「わしは御前の心まで殺したくはないのだ」

「殺す……」

「そつだ」

闇の中で目が血走っていた。憎しみに燃えていた。

「わかれば。祈れ」

「そんな……私は何も」

「御前の罪を考えるのだ」

憎悪に満ちた声で述べた。

「御前の罪をな」

「私の罪を」

「そつだ。それは何だ」

「愛したことです」

それしか考えられなかった。デズデモーナには。

「それ以外は何も……」

「そつだ、愛だ」

憎悪に満ちた声で今愛だと言った。

「御前はそれ故に死ぬのだ」

「では貴方を愛したから私を殺すと仰るのですか？」

「御前はカッシオを愛した」

オテロの言葉だ。

「そんな、それは……」

「さあ、死ぬのだ」

有無を言わせぬ言葉だった。オテロはそれ以外に言葉を知らない

かのようにだった。

「今すぐここで」

「今日だけでも」

そうすればわかると思った。だが。

「駄目だ」

憎悪がそれを拒んだ。

「今すぐだ」

「一刻だけでも」

「駄目だ」

やはりそれも拒む。

「ほんの一瞬でも」

「駄目だ」

これも駄目だった。

「お祈りを捧げるその間は」

「駄目だ！」

遂に叫び。そしてデズデモーナの首に両手をかける。

「死ね！今すぐここで！」

「オテロ様、どうして私を」

「黙れ、黙れ！」

寝台の上で倒れていくデズデモーナの上で叫ぶ。その両手で彼女の首を絞める。デズデモーナはそれを抵抗することもなく受けるだけだった。

「ここで死ね。わしの手で！」

「オテロ様……」

デズデモーナは意識を失った。死んだと思った。そう思ったオテロは顔を上げた。次にベッドから出る。そのうえで肩で息をしながら呟くのだった。

「墓場のように静かだな」

だがその静寂は一瞬だった。扉を叩く音が聞こえてきたのだ。

第四幕その三

「誰だ」

「奥様」

エミーリアの声だった。

「エミーリアか」

「大変でございます、大変でございます」

「どうしたのだ？」

「その声は旦那様ですか」

「そうだ、わしだ」

オテロは答えた。

「それで一体どうしたのだ？」

オテロは自分から扉に近付き開けた。するとそこからそのエミーリアが肩で息をしながら入って来たのだった。まるで恐ろしいものを見たかのように。

「大変なこととは」

「カツシオ様がですね」

「カツシオがイヤーゴに」

「違います」

オテロのその言葉はすぐに否定された。

「カツシオ様がロデリーゴ様を殺されたのです。夜道に襲い掛かって来られたロデリーゴ様を」

「馬鹿な、あいつが生きている」

オテロはそれを否定した。

「そんな馬鹿な。それに」

エミーリアはここで心の中に不吉なものを感じた。慌てて部屋の中を見回すと。

「奥様は何処に」

「エミー……リア？」

その時だった。不意にデズデモーナの弱々しい声が聞こえてきた。

「その声は……奥様」

「私は……」

ベッドの方から声がするのがわかった。血相を変えてそこを見るとそこには仰向けに弱々しく倒れ伏すデズデモーナの姿があった。

エミリアは彼女のその姿を見て血相を変えた。

「奥様！」

「私は無実の罪で死ぬわ」

「え……そんな」

「誰の罪でもないの。だから気にしないで」

「気にしないでと言われても」

そんなことは無理だった。デズデモーナにとっては。

「そんな……奥様」

「さようなら」

一言だけだった。

「今まで有り難う」

「どうして……どうしてこんな」

「わしが殺した」

オテロはデズデモーナに背を向けて言うのだった。

「わしがな」

「何故そんなことを」

「あの女はカツシオの情婦だった」

「そんなことは有り得ません」

「いや、確かだ」

しかし彼はまだ言う。

「イヤーゴに聞けばわかる。御前の夫にな」

「主人が。まさか」

「しかし本当のことだ」

オテロはこの時までイヤーゴを信じていた。

「わしは本当に聞いたからな」

「そんなことは有り得ません」

エミーリアは夫よりもデズデモーナを信じていた。だからそれを聞いても信じなかったのだ。首を横に振ってから言うのだった。

「貴方は愚か者です」

「わしを愚かだというのか」

「ええ。何度でも言いますよ」

デズデモーナの遺体の前に立っていた。ベッドの上に青い顔をして目を閉じて横たわる彼女の前に。そうしてオテロを見据えていた。貴方は馬鹿です。この人殺し！」

「何！」

「旦那様が奥様を殺された！誰にでも言いますよ！」

「貴様！」

「何だ！？」

「今度は何事だ！？」

その時だった。オテロとエミーリアの言い争いを聞きつけたカッショとロドヴィーゴ、モンターノ、そしてイヤーゴが幾人かの兵士達を引き連れて扉から部屋に駆け込んで来た。彼等はオテロとエミーリアの間に入ってまずは呆然としていた。ただイヤーゴの顔は仮面だ。

「ねえあなた」

エミーリアは不吉なものを感じさせる顔で自身の夫に顔を向けて問うた。

「あなたに聞くよ」

「何だ」

「旦那様に奥様が不義を働いているって言ったのかい？」

「違うのか」

「何を証拠に」

「ハンカチだ」

オテロがここで言う。

「ハンカチによってだ。わしがあれにやったハンカチをカッショが

持っていたのだ」

「旦那様、貴方は本当に」

エミーリアはそれを聞いて完全にわかった。それと共に呆れ果てた。

「よくもまあそんな簡単に騙されて。何を見ていたのですか」

「あれの醜い心をだ」

「そう見えるのなら本当に貴方は愚かな方です」

徐々に怒りがこみ上げてきているのを自分でも感じていた。その中でまた言うのだ。

「あのハンカチは」

「おい」

イヤーゴはここでエミーリアに対してすごんだ。

第四幕その四

「黙っている」

「いえ、言っわ」

「黙っている」

「どうしたのよ、あんた」

エミーリアもまたイヤーゴの素顔を知らなかった。しかしそれでも言っのだった。

「言っわ。奥様の為に」

「だから黙っている」

「あのハンカチは私が拾ってそれを主人に頼まれて渡したものです」
「何っ!？」

それを聞いたオテロの顔が曇った。

「どういうことだ、それは」

「ですからその後は」

「くっ……」

イヤーゴはエミーリアに怪訝な顔で問うオテロの後ろで齒噛みしていた。そしてここで言うのはカッシオだった。

「私はそのハンカチを部屋で」

「ますますわからん。何なのだ」

「閣下!」

ここで扉に兵士の一人が飛び込んで来た。

「どうした」

「大変なことです。ロデリーゴ殿が最後に仰ったのですが」

「うむ」

その兵士の言葉を一同聞く。だがイヤーゴはその中で何とかその場から逃れようとしていた。陰険な悪魔の顔で。

「イヤーゴ殿がデステモーナ様との縁を取り持つからと。カッシオ様を暗殺されよと。手伝うからと」

「そういえば」

カツシオがまた声をあげた。

「あの時刺客は二人いた。それでは」

「では、だ」

オテロはここで全てがわかった。

「わしにデズデモーナのことをそそのかしたのは」

「あと閣下」

またカツシオがオテロに言う。

「私は。ビアンカという女と」

「それでは」

「そうだ。あんたが」

エミールリアもまた。全てがわかった。また血相を変えてイヤーゴを見る。

「全部。仕組んで」

「違う！」

「そうじゃないかい。全部！」

「黙れ！」

遂に感情を爆発させた。剣を抜きそれで自分の妻を切り捨てた。そのうえで逃げようとする。しかし。

「馬鹿だった」

オテロは俯いて呟いていた。

「馬鹿だった。わしは馬鹿だった」

「閣下……」

「だが。あの男は逃がさん」

しかし目は生きていた。顔を上げるときつとイヤーゴを見据える。側の兵士に顔を向ける。そして彼に言った。

「槍を渡せ」

「槍をですか」

「そうだ。これで」

兵士から槍を受け取ると。それをイヤーゴに向かって投げた。槍

はイヤーゴの背を貫きそのまま心の臓まで貫き通した。イヤーゴは前に倒れていく中で最期の呪詛の言葉を漏らした。

「おのれ……」

「悪魔は死んだ」

モニターノはそれを見て呟いた。

「実直な顔は仮面だったか。全ては」

「閣下」

ロドヴィーゴが今槍を投げたオテロのところに来て。静かに告げた。

「申し訳ありませんが」

「何を言われるか」

しかしオテロはその彼に対して言うのだった。

「例えまだほかに武器を持っていたとしてもわしを恐れる者はいません」

「それはどういう意味ですか」

「オテロの旅は終わったのです」

そう彼に告げると静かにデズデモーナのところに歩み寄った。苦渋に満ちた顔で妻の死に顔を見ている。

「何と蒼ざめていることが。疲れてもの言わず美しくそれでいて不運の星の下に生まれた女よ」

妻へのことアだった。

「清らかな女。汚れのないその生涯の様に冷たく天に昇る女、デズデモーナよ」

そう妻の亡骸に告げると。懐から剣を出した。皆が止める間もなくその剣を己の胸に突き刺すのだった。

「閣下！」

「何故！」

「言った筈。わしの旅は終わった」

ベッドに倒れ込む。その中での言葉だった。

「デズデモーナ」

前にいる妻び呼び掛ける。

「最期に口付けをしたな。今また再び、わしの最期に……」
何とか妻に近寄ろうとするがそこで力尽きた。ロドヴィーゴがその彼のところに歩み寄り自分の手でその目を閉じさせオテロとデズデモーナの手を握り合わせた。人々はその二人の亡骸を囲んで静かに胸で十字を切るのだった。二人の魂の鎮魂に。

オテロ 完

2008・4・10

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1216i/>

オテロ

2011年4月28日00時36分発行